3. 「児童センターにおける幼児・学童の体力・運動能力の測定法に関する研究」

その 1. 測定法作成のための基礎的・文献的検討

研究協力者　小山　一宏
小林　芳文

体力向上のための国民運動は，今や国民的課題である。とりわけ，発育・発達期にある児童の体力増進活動に関しては，そのねらいとするところが大きい。児童の置かれている文化的・社会的諸環境，さらには物理的環境が，彼らの健全育成に，必らずしも効果的に作用していない現状を振り返っても理解できるところである。

児童センターは，地域社会における児童の健全育成の重要な児童厚生施設である。その機能は，設置運営要綱でも明らかなように，小型児童館の機能に加えて，遊び（運動を主とする）を通して運動に親しむ習慣の形成，運動の仕方，技能の習得，精神の涵養等による体力増進を図ることを目的とした特別の指導機能を有するものである。そして，最も大きな特色は，健康な児童はもとより，加えて，とくに体力増進指導が必要な児童の体力づくりに寄与するところである。運動不足，運動嫌い等により体力の立ち遅れのある幼児・児童等は，その主な対象児童である。

しかし，重要なことは，このような施設で，真に，体力増進指導を必要とする児童に対して，どのような接近で適切な指導を行なうかである。効果的な指導プログラムの適用は，まず，その必要条件である。そして，そのためには，彼らの体力・運動能力が，どのような状態にあるのか，それを適切にアセスメントすることである。本研究は，アセスメントに向けて，測定法作成のための基礎的，文献的検討を試みようとしたものである。

2. 研究の方法

日本，および諸外国で試みられ，発表された文献を収集し，まず体力，運動能力の構造を明確にする。そして，とくに幼児・学童の論文に限定し，その構造を再整理すると同時に，アセスメントに必要な体力・運動能力因子の軸を定める。これにより，児童センターでの児童のための体力・運動能力測定方法作成に対する今後の研究の方向づけを行なう。

3. 研究の結果

(1) 体力・運動能力因子構造研究の歴史概要

これまで体力・運動能力一般に関する因子構造の研究は，数多くのものが発表されているが，多くはアメリカの諸研究者によりなされたものである。

因子構造の分析的研究の最初は，1921年Perrin F.A.C により行なわれた。彼は，「複雑な運動は単一の運動機能によって説明されうるような簡単な構造をもつものではない」と述べ，運動能力の多因子性格を暗示した。この研究に続きMusico,B,Garfiel,Eなどが研究を試みた。とくに，1929年McCurdy,C.H.の研究は注目された。彼は，全米体育学会において，「筋力，成熟度，速度，持久力及び敏捷性は，一般運動能力の因子である。したがって，運動能力を測定するには，ここにあげた因子を測定する測定項目がテスト・バッテリーの中に含まれること」と述べた。

1934年には，McCloy,C.H.が多因子解法を運動素質テスト・バッテリーに適用し，急速に因子構造の研究が進んだ。そして，1935年にRoggen,A.が，1936年にMcNemmer,Qが，

1937年には，Coleman,J.W.Rarick,L.,Metheny,E.など多くの研究が発表された。

このようにして1940年，1950年，1960年と数多くの研究がなされた。いわば1960年代に入り因子分析の研究は，方法論的にほぼ確立されたのである。とくに注目すべき研究は，1962年にNicks,D.C.とFleishman,E.A.のものである。彼らは，これまで発表された運動能力の因子分析的研究を整理し，次のようなPhysical fitness（体力）の因子構造を発表した。①筋力の領域（瞬発筋力，動的筋力，静的筋力）②柔軟度ー速度の領域，③平衡性の領域（静的，動的，物的）④協調能力の領域，⑤持久力の領域である。このような運動能力因子を基本的に把えた測定方法がほぼ今日に続いているのである。

わが国では，文部省がアメリカのYouth Fitness Programにならい昭和39年以来，スポーツテストによって，青少年の体力・運動筋力の実態を全国的規模で調査した。しかし，このスポーツテストは，元来，年少の幼児・学童を対象としていなかったので，今日まで彼らのための定められた測定方法がほとんどないのが現状である。

最近，文部省は幼児体力測定委員会を組織し，幼児体力測定方法の試案を作ったが，この研究は，本研究に最も応用できるものといえる。

(2) 今後の研究方向

幼児・学童の発達特性を加味し，文部省の幼児体力測定方法を参考にして，児童センターの特色が出せる体力・運動能力測定法を開発し，最終的なねらいである，児童センターを利用する児童に対する体力増進活動の運動指導プログラムを作成し，実践普及のための検討を行なう。

4. 小児の精神・身体発育から見た初期環境におけるSeparation,Deprivationの影響に関する研究

研究協力者　網野　武博
金子　保

研究目的

乳幼児期の発達環境（初期環境）が，その後の精神身体発育に様々な影響を及ぼすとされているが，今日とくに縦断的発達研究が進んでいる中で，主として現代の親的養育環境の相違とその発育発達効果を考察するものである。今年度は，「乳幼児期におけるSeparation.deprivation とその影響」に関する文献的考察を行った。

研究結果

1. 乳幼児期の発育発達研究とくに縦断的発達研究の今日的動向と課題

乳幼児期の研究が，今日の発育発達研究に欠かせなくなった背景として，初期経験の永続的な効果が主張された事などあげられる。その1例が，乳幼児期の分離，喪失と，愛着行動形成の障害である。そこでここでいう初期経験という言葉を考えてみると，次の2点が問題になると思われる。その(1)は，初期というのは，いつまでの事をいうのか，その(2)は，いかなる経験が発育発達に望ましいかである。(1)の時期の問題は，以前は刻印づけの考えから，初期のある時期を越えると，その後の環境は影響し

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

体力向上のための国民運動は,今や国民的課題である。とりわけ,発育・発達期にある児童の体力増進活動に関しては,そのねらいとするところが大きい。児童の置かれている文化的・社会的諸環境,さらには物理的環境が,彼らの健全育成に,必らずしも効果的に作用していない現状を振り返っても理解できるところである。